

## 「Japanese Nightingale Doesn't Sing At Night : Curated by American Boyfriend」のご案内

このたびXYZ collective (東京・世田谷) では、2015年6月21日 (日) から7月19日 (日) まで、American Boyfriendキュレーションによる「Japanese Nightingale Doesn't Sing At Night」を開催いたします。本展はミヤギフトシによるアートプロジェクト「American Boyfriend」の活動のひとつとして企画され、ミヤギが共感し「American Boyfriend」のステイトメントと親和性のある国内外5名の作家の作品と、ミヤギが出会った「ある日系アメリカ人作家」の小説によって構成されます。

□ □ □

もしわたしたちが社会的な生き物であり、わたしたちの生存が相互依存性の承認(それは類似性の認知によるものではないかもしれないのだが)にかかっているのであれば、わたしが生きのびるのは、孤立し境界をつけられた存在としてではなく、境界線によって自発的にそして意図せずして(時には同時にその両方のかたちで)他者にさらされている存在としてである。そのようにさらされていることこそ、社会性と生存の双方の条件なのだ。

ジュディス・バトラー (清水晶子訳) 『戦争の枠組 生はいつ嘆きうるものであるか』 (筑摩書房、2012年)

米軍基地のフェンスに象徴される無数の境界線が社会を分断する沖縄において、たとえば「男性米軍兵と沖縄人男性との間で育まれた恋」のような、フェンス越しに存在したかもしれない密やかな関係の可能性を探るプロジェクト「American Boyfriend」。本展は、「American Boyfriend」において考え続けてきた境界線と、境界線を介した関係(それは必ずしも暴力的なものばかりではない)は普遍的に存在するのではないか、という興味に端を発している。世界中の様々な場所、様々な時代に生まれた境界を介する関係は、どのように共鳴するのか。

バトラーの言うように、「さらされていることこそ、社会性と生存の双方の条件」であるならば、隔たりに晒された関係性は普遍的なものでもあらず。世界のさまざまな場所や時代において、言語や文化の差がもたらす誤解があり、境界線を壊してしまおうと試みるものたちが存在し、そして境界線にさらされながら同じ空気を共有しようとするものたちがいる。それは多くの場合政治家でも活動家でも芸術家でもない、ごく身近な「わたしたち」だ。わたしたちは境界線にさらされ続けている。それは対峙の場であるとともに、触れあいの可能性を秘めた領域にもなり得るのかもしれない。境界線の向こうで同じ空気を共有しているはずの「だれか」を想像し、時に手を差し伸べてみる。それは、決して無意味なことではないはず。

100年前のアメリカで、「日系アメリカ人作家オノト・ワタンナ」というペルソナを用い、日系人として小説を書いていた中国系カナダ人の女性作家ウィニフレッド・イートンは、日本を舞台にした『A Japanese Nightingale』(1902年)という恋愛小説を発表し、ベストセラーとなる。しかし、その小説はタイトルから奇妙な矛盾をはらんでいる。彼女がジャパニーズ・ナイチンゲールと呼んだ鳥、ウグイスは、ナイチンゲールのように夜に鳴かない。しかし、彼女のいた場所と彼女が描いた場所は、太平洋という遙かな海で隔てられていた。それでも彼女は、物語を生み出した。

ミヤギフトシ、2015年4月

## アーティスト・作品紹介

---

### ヨハンナ・ビリング / Johanna BILLING

1973年、スウェーデン・ヨンショーピング生まれ。1999年、コンストファク（スウェーデン国立ストックホルム美術工芸デザイン大学）卒業。ストックホルムを拠点に活動する。映像作品を主に製作する。音楽を演奏するなど、ある行為を人々が共同で行う場を作り出し、その共同作業の中で生み出される関係性に焦点をあてた作品群で知られる。 <http://www.makeithappen.org/johannabilling.html>

ヨハンナ・ビリング《マジカル・ワールド》 2005年

《マジカル・ワールド》は、クロアチアのザグレブ近郊にある古ぼけた文化センターで行われた子供たちの演奏会の様子を記録したもの。彼らが練習している曲は、1960年にアメリカのソウルグループであるロータリー・コネクションが出した唯一のヒット曲「マジカル・ワールド」だ。アフリカ系アメリカ人の公民権運動が高まりを見せていた頃、変革への夢をサイケデリックなサウンドと郷愁的なメロディーに乗せて歌う同曲はまた、不安定ながらも国家として成熟しようと、そして独自の文化を作ろうとするクロアチアの近代史と奇妙に共鳴する。建国間もなく脆さをはらむ国家のアイデンティティが、ここでは、声変わりもまだしていない、英語を理解していない男の子が歌う「魔法の世界」に託される。

---

### カルロス・モッタ / Carlos MOTTA

1978年、コロンビア・ボゴタ生まれ。ニューヨークを拠点に活動する。様々な表現媒体を用いて、政治的な歴史において、カウンターとなる語りを生み出すことで、抑圧された歴史、コミュニティ、そしてアイデンティティを掘り起こす。ホイットニー美術館インディペンデント・スタジオ・プログラムを2006年に卒業、2008年、グッゲンハイム財団のフェローとなった。 <http://carlosmotta.com/>

カルロス・モッタ《難破》 2013年

《難破》は、ブラジルの人類学者・歴史研究者・ゲイ運動家であるルイス・ボットによる「17世紀バハ、男色流刑者の不運な物語」に着想を得たフィクション。物語

は、ポルトガル人ルイス・デルガドの半生を追う。同性愛行為を重ねるデルガドは、社会的・宗教的倫理観に抗い続ける悪名高い存在だった。ブラジルに島流しにあうものの、そこでも厳しい植民地の掟に歯向かうように同性愛行為を男たちと持ち続ける。その後リスボンに戻され裁判にかけられ、公の場で拷問を受け、辱められ、そしてアフリカへの永久追放を言い渡される。リスボンの歴史地区で撮影された本作は、宗教と法が重くのしかかる時代に乱交的かつロマンティックな関係を持ち続けた男の、今では忘れられた語りを拾い上げてゆく。

---

### 沢渡朔 / Hajime SAWATARI

1940年、東京生まれ。

沢渡朔《ハロウィン》 1960年

2014年末に出版された沢渡朔《Showa 35, Japan》は、作家が20歳の頃に撮影したイメージをまとめたものだ。1960年、まだ名を知られぬ一人の写真好きの青年が純粋な視線で切り取った日本の中のアメリカは、ごくパーソナルで、その視線に政治性は希薄だ。そこにあるのは、新時代への期待や新しい文化への憧れとともに、アメリカのすぐ近くに生きる青年の、時代の喧騒をよそに営まれる日々の記録。進駐クラブ、アメリカ人女性、横田や福生、ワシントンハイツに住む子供たちによるハロウィン行進。これらは、カメラを手にした二十歳の青年が1960年に、ただそこで見た風景だ。

---

## アーティスト・作品紹介

---

### 碓井ゆい / Yui USUI

1980年、東京生まれ。多摩美術大学美術学部絵画学科卒業(2004)、京都市立芸術大学大学院美術研究科修了(2006)。壁に貼られた子供向けのシールや、花柄の壁紙など、忘れされた小さな記憶をモチーフにした絵画作品やドローイング、立体作品を製作。そのようなささやかな表象から、それらを内包する文化や制度へ、見るものの意識を向けさせる。

<http://yuiusui.com/>

#### 碓井ゆい《空 (から) の名前》 2013年

《空 (から) の名前》は、香水を彷彿とさせる古ぼけたラベルが貼られた、いびつな形のボトルが並んだ作品。ジャポニズムの時代にフランスで生まれ今なお生産されている香水「MITSOUKO」に着想を得て作られたボトルのラベルには日本人女性らしき名前が記されており、それらは作家が従軍慰安婦にまつわる資料の中で見つけた、「日本名」を用いて軍人たちに向き合った女性たちの名前。少しくすみ、気泡を含んだ透明なボトルたちは、ただただ透明で魅力的な空 (から) の受けものとして、その古ぼけた名前だけが現るものの視線に対峙する。

---

### エイミー・ヤオ / Amy YAO

1977年、ロサンゼルス生まれ。2007年イエール大学美術学部卒業。2012年、ロサンゼルスのマウンテン・スクール・オブ・アート修了。ニューヨークを拠点に活動を行う。ビニール傘や脚立、扇子など日用品を用いた立体作品の他、ペインティングやコラージュなど、媒体は多岐にわたる。アイロニーと軽さを交えながら、アジア的文化など、特定の文化をハイブリッド的に表現する手法が特徴的。 <http://www.amyyao.info/>

#### エイミー・ヤオ《インテリアとしての風流傘 no.10》 2011年、《うちわ no.3 未来》 2013年

中国系アメリカ人であるエイミー・ヤオの作る作品は、その文化的アイデンティティの希薄さが特徴だと言える。アジア的表象は、極めて没個性的な市販品の「残骸」として表象され、彼女のアイデンティティの根幹をなすはずであろう文化との断絶を際立たせる。《インテリアとしての風流傘》と名付けられた骨だけになったコンビニ傘には、パールのネックレスが鎖のように連なり、もはや傘としての機能はもたない。タバコの吸殻やマッチが付着した扇子も同様だ。壊れた傘にまわりつく真珠や、扇子に付着したタバコは、ある暴力の痕跡を連想させる。

---

## American Boyfriend

沖縄生まれのミヤギフトシが、セクシャル・マイノリティとしての自身のアイデンティティと向き合い、人種、国籍、セクシャリティなどをテーマに、写真、映像、オブジェ、テキスト、印刷物、パフォーマンス、インスタレーションといった多様な作品形態で展開するアートプロジェクトです。

American Boyfriendオフィシャルウェブサイト | [www.americanboyfriend.com](http://www.americanboyfriend.com)

American Boyfriendステイトメント | [www.americanboyfriend.com/statement](http://www.americanboyfriend.com/statement)

企画 | 兼平彦太郎 デザイン | 木村稔将 プレス | 増崎真帆

## ミヤギフトシ / Futoshi MIYAGI

1981年沖縄生まれ。東京在住。20歳のときにアメリカに渡り、NYのプリンテッドマターに勤務しながら自身の作家活動を開始する。帰国後、青山のセレクトブックショップ「ユトレヒト」やアートブックフェア「THE TOKYO ART BOOK FAIR」のスタッフとしても活動しながら、創作を続ける。主な展覧会に「他人の時間」東京都現代美術館（グループ展、国立国際美術館他に巡回）（2015）、「American Boyfriend: Bodies of Water」京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA（2014）、「American Boyfriend: The Ocean View Resort」Raum1F、東京・神宮前（2013）、「new message」Post、東京・恵比寿（2013）、「A Cup of Tea」hiromi yoshii、東京・清澄白河（2010）など。著書・刊行物に「sight seeing」自費出版（2010）、雑誌「OSSU」自費出版（2011～2013 \*森栄喜、川島小鳥らと共同発行）、「new message」torch press刊（2013）。そのほか2014年からはユリイカ、新潮など文芸、批評雑誌へも寄稿をしている。

作家ウェブサイト | [www.fmiyagi.com](http://www.fmiyagi.com)

タイトル | 「Japanese Nightingale Doesn't Sing At Night : Curated by American Boyfriend」

会期 | 2015年6月21日（日）から7月19日（日） 14:00-19:00 \*月火水休

会場 | XYZ collective (〒154-0016 東京都世田谷区弦巻2-30-20)

レセプション | 2015年6月21日（日） 16:00-19:00

【同時開催】 Super Young series / vol,1 「Tan Kagami Solo show」 at The Stake House DOSKOI

XYZ collective webサイト | <http://xyzcollective.org>

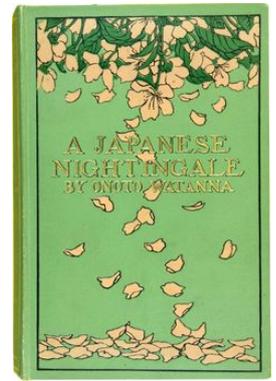
作品画像



1.



2.



3.



4.



5.



6.



1. 碓井ゆい《空 (から) の名前》 2013年 Photo by Koichi Yamaguchi
2. ヨハンナ・ピリング《マジカル・ワールド》 2005年
3. オノト・ワタンナ《A Japanese Nightingale》 \*参考出品
4. カルロス・モッタ《難破》 2013年
5. エイミー・ヤオ《うちわ no.3 未来》 2013年、《インテリアとしての風流傘 no.10》 2011年
6. 沢渡朔《ハロウィン》 1960年